

秘密教

秘密教は秘密不定教ともいい、仏の説法を聴く衆生が、互いにその存在を知らず（秘密）、同じ教えを聴きながらもそれぞれ機根に応じて聞き方を異にし（同聴異聞）、その得益が一定しない（不定）という化導法をいいます。この説法の方法は華嚴時の一部や、阿含時・方等時・般若時にあたります。

不定教

不定教は顕露不定教ともいい、仏の説法を聴く衆生が、互いにその存在を知り（顕露）ながらも秘密教と同じ同聴異聞であったため、衆生の得益が不定であるという化導法をいいます。この説法方法は前の秘密教と同じく、華嚴時の一部や阿含時・方等時・般若時にあたります。

このように仏がさまざまな手段・方法をもって説法されたのは、衆生の機根を徐々に調えて真実無上の法華經に導き衆生の得脱をはかるためでした。この法華經は、仏の悟りをそのままに説かれた純粹な円教であり、また化法・化儀の八教を超越しているところから「超八醍醐」といわれます。

二、法華經

釈尊は成道を遂げた後、四十二年の間、衆生の機根に応じて多くの經々を説きました。しかし、これらの諸經は「法華經」という最勝真実の教えに導くための「方便（権の教え）」であったと、釈尊は

述べられています。すなわち法華經の『方便品第二』に、

「正直に方便を捨てて但無上道を説く」（開結二二四）

と説かれ、また『法師品第十』にも、

「此の經は、方便の門を開いて真実の相を示す」（開結三二八）

と説かれるように、法華經こそが真実無上の教えであることを明かされています。

法華經の漢訳と題号

法華經の漢訳

法華經の原本は、インドの各地で発掘されていますが、これらはすべて古代インドの言語であるサンスクリット語（梵語）で書かれており、それぞれの内容に大小の違いがありました。また、それぞれの梵本に従って、後代の僧侶らが自国の言葉に翻訳したため、次の六種の漢訳本が生まれました。

- 一、『法華三昧經』（六卷）・正無畏訳・魏の時代（二五六年）
- 二、『薩曇分陀利經』（六卷）・竺法護訳・西晋時代（二六五年）
- 三、『正法華經』（十卷）・竺法護訳・西晋時代（二八六年）
- 四、『方等法華經』（五卷）・支道根訳・東晋時代（三三五年）
- 五、『妙法蓮華經』（八卷）・鳩摩羅什訳・後秦時代（四〇六年）
- 六、『添品法華經』（七卷）・闍那崛多・笈多訳・隋の時代（六〇一年）